

現代詩人群像

民衆詩派とその圏

乙骨明夫



笠間書院

現代詩人群像

民衆詩派とその周圈

乙骨明夫

江苏工业学院图书馆

藏 书 章

笠間書院

現代詩人群像

—民衆詩派とその周囲—

©OKKOTSU 1991

平成3年5月25日 初版第1刷発行

定価 3,914 円 (本体 3,800円)

著 者 乙 骨 明 夫

発行者 池 田 つや子

発行所 有限会社 笠間書院

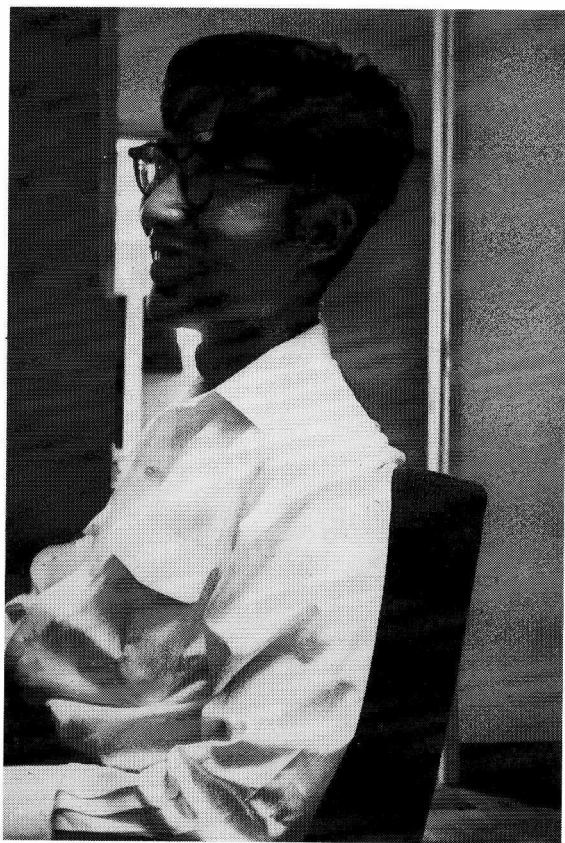
東京都千代田区猿楽町 2-2-5

興新ビル 〒 101

電話 東京 03 (3295) 1331

落丁・乱丁本はお取替えいたします。三美印刷・手塚製本所

3090-955057-0924



著者遺影

は し が き

去る平成二年十二月に「乙骨明夫先生追憶集」を編んで故人に縁深かった方々にお配りしましたが、このたび、先生の遺された論文を一括して上梓できたことを、心から嬉しく思っております。先生は近代文学専攻、特に近代詩の研究の中でもなかならず天逝詩人、世にかえりみられなかった詩人に深い愛着を抱いておられ、かれらを世に紹介し、その詩の真価を問うことに、学究としての自己の使命を感じておられたように私には思われてなりません。言うまでもなく、先生御自身が詩人であり、病弱の身で書かれたとは思われないう数多くの力強い遺墨は、みな自作の詩句であるといえました。

昭和四十五年創刊の本学国文学会誌「国文白百合」に投稿された「井上康文と民衆——現代詩人素描（二）——」から平成元年、絶筆となった同誌二十号の「信仰詩人、花岡謙二——現代詩人素描（二十）——」まで、先生は二十人余りの詩人素描を一冊にまとめたとお考えではなかったかと思えます。

先生はまた、知る人ぞ知る古書愛好家でもあり、「古書店めぐり」「古書礼賛」などの短文をものしておられます。病身にむち打って、あちこちの古書店、古書展を歩きながら集められたおびただしい貴重な資料が、本学図書館に寄贈されており、近・現代詩研究の発展に寄与できる日もそう遠くはないでしょう。

最後に、諸誌に分散していた乙骨先生の論文を、このように整理し、出版までこぎつけられた月本雅幸氏はじめ国文学科全スタッフ、助手さん達に感謝し、また快く出版を引き受けて下さった笠間書院に深く御礼を申しあげます。

平成三年三月

白百合女子大学

学長 片岡照子

弟・明夫が亡くなったのが、ついこの間のように思えるが、早くも三回忌を迎えた。持病の気管支拡張症が悪化して肺化膿症をおこした彼は、病魔と必死に闘ったが、遂に力尽き、一九八九年一月七日午後七時過ぎ、六三歳一ヶ月の生涯を閉じた。

四歳年下の弟とは、小・中学校とも同じ学校であったが、私よりもはるかに勉強家であった。中学校の高学年のときに咯血し、一年間休学しながらもひるまずに猛勉強し、旧制第一高等学校に合格した。それから東京大学文学部国文学科へ進学し、卒業後は教職の道へと進んでいったが、病弱の身体に鞭打って命の限り頑張つてこられたのは、勤務先の白百合女子大学をこよなく愛して、大学教育にたずさわることを天職と心得、また詩誌のコレクションと合わせて「日本近代詩の研究」を畢生の仕事として取組んできた姿勢によることは勿論であるが、やはり強靱な精神力の持主だったからであろう。

このたび、明夫が生前に執筆した日本近代詩関係の論文を編集した著作集が出版されることになった。編

III は し が き

集の労をとられた白百合女子大学と製作・出版を引受けられた笠間書院に対し厚くお礼を申しあげたい。そして、天国の明夫と児童文学作家であった妻淑子にこの著作集を捧げたいと思う。

平成三年三月

乙 骨 達 夫

目次

はしがき I

第一部 現代詩史

自由詩創成期に関する小見 3
 民衆派の詩について 33
 終戦直後の詩についての一考察 60

第二部 現代詩人素描

井上康文と「民衆」 101
 「感情」の二詩人 竹村俊郎と多田不二 112
 『海港』の三詩人 柳沢健・熊田精華・北村初雄 124
 「曙光詩社」の山崎泰雄 136

室生犀星門下の平木二六	144
異色のプロレタリア詩人 松本淳三	155
風刺詩人 野村吉哉	165
漂泊詩人 三石勝五郎	175
象徴詩人 梶浦正之	186
鬱憂の詩人 林信一	196
都会詩人 大藤治郎	205
繊細な叙情詩人 国木田虎雄	214
真率な叙情詩人 宮崎孝政	221
嗅覚の詩人 矢部季	230
清澄の詩人 赤松月船	240
民謡詩人 霜田史光	249
生命感の詩人 田中清一	259
直進の詩人 相川俊孝	269
信仰詩人 花岡謙二	277
詩史新編成への布石	
補遺(山崎泰雄・野村吉哉・三石勝五郎)	287

第三部 民衆派詩人論

白鳥省吾論——「世界の一人」を中心に——	295
白鳥省吾論——民衆派のころ——	314
川路柳虹論——口語自由詩を書きはじめた時期 の詩について——	333
百田宗治論——『ぬかるみの街道』まで——	354
初出一覧	374
乙骨明夫教授略歴	378
乙骨明夫教授業績目録（抄）	379
あとがき	386

第一部 現代詩史

自由詩創成期に関する小見

(一)

明治三十年代後半に「海潮音」「春鳥集」「白羊宮」が出て、詩壇は黄金時代を築いた。それに続く四十年代から大正初期にかけては、普通「白露の時代」とよばれることは人の知る通りである。事実「邪宗門」「廃園」「思ひ出」「寂しき曙」「東京景物詩」「白き手の獵人」はすぐれた詩集である。しかしこの時代は一方、耽之介もよぶ詩壇「第二の草創時代」である。作品としてはあるいは拙作が多いかもしれないが、運動の方面からみる時は白露以上に買いたい人が沢山いる。はなはだ興味深い時代だ。これに関しては既に人見円吉氏が「口語詩の発達」において精細な研究をなされているし、服部嘉香氏も自由詩

史を準備されているかに承っているが、これまでに世にあらわれているものとの重複を避けつつ、私なりの見解をいささか述べさせていただくことにした。

先ず第一に、「自由詩」「口語詩」のそれぞれの名称の意味するところが、どのように違っていたか、あるいは同一であったかについて検討してみたい。

「自由詩」という名称の誕生については、人見氏の記されるところによれば、服部嘉香の「最近文壇諸問題鳥目観」(『早稲田文学』明治四十一年十月)と相馬御風の「蒲原有明氏の新詩歌観について」(『新潮』同年同月)に見えるのが最初である。(『口語詩の発達』(四五頁) (註) 以下の文では明治という年号を省略する)

「口語詩」という名称は、やはり人見氏の記されるところによれば、四十年五月の「文庫」に人見東明が匿名で

批評した「近刊の二詩集」に見えたのが最初である。(口語詩の発達(三六四頁)したがって「自由詩」よりはずっと早く使われたわけであるが、この場合の「口語詩」は野口雨情の民謡風定型の作品を称したのだから、単に口語を使った詩という意味であって、「自由詩」とは一致しない。その点では葛の葉(森川葵村)の使った「言文一致詩」(詩人〔四十年七月〕も、服部嘉香の「言文一致詩」(詩人〔四十年十月〕も、蛙鳴の「言文一致詩」(帝國文学〔四十年十一月〕も、島村抱月の「言文一致の詩」(詩人〔四十年十一月〕も同じであった。

一体、柳虹の「新詩四章」が出たころは、「口語詩」という名称はまだ広く使われてはいなかった。この語が多く使われ出したのは、四十一年五月に「瘦犬」と「暗い扉」とが出て以後である。それまでは、似た意味を持ついくつかの名称が使われていた。先ずそれらについてしらべてみよう。そしてそれらの語は、「口語を使った詩」というだけの意味であつたか(つまり「口語定型体」をも含んでいたか)、それとも「自由詩」の意味に近く、形式の自由という条件も考えていたかどうかを検討してみよう。蒲原有明の「言文一致の新体詩」は、

此の頃の傾向として、やゝ新しいのは言文一致の新体詩が顔を出して来たことである。言文一致と言つたところで、俗謡風、民謡調の如きものでなく、今の小説などに用ひて居るやうな、普通の言葉が、詩の中に使はれて来たことである。

―「言文一致の詩歌」(ハガキ文学四一・二)―
と民謡調とは区別されている。幽玄郎の「言文一致」の詩は

新詩の将来はいかなる形式内容のものであらうかとは折々読者の話柄に上る問題の一である。中には口語を以て其形を作らうと試みつつある人も見受けるが自分はこれには同じ難い。元より詩歌の一部として民謡風の形式をかる口語体の作品はよいが、いかに言文一致が波及したとは言へ、これを以て詩歌本道の形式にあてゐる事は不可能である。

―「詩歌と音楽との交渉」(帝國文学四一・二)―
とあることから、民謡風以外の詩をも念頭においていたことがわかる。また、よよ生が御風の輪を駁して、

昨年来似非自然主義の流行につれて詩界にまで極端な破壊論が行はれる。即ち『早稲田文学』の一記者

が従来の詩形を破壊して口語を以て赤裸々に作れと言ふ議論などが其である。

—「詩界の近状」(二六新聞四一・三・二九)—

と述べているが、「詩形を破壊して」とあるところからみると、用語と共に詩形の自由ということも併せ考えていたと思われる。RTO(折竹夢峰)の「言文一致詩」になると、

一派の詩人の如く言文一致詩の最上の境地が俗謡に止まると言ふ如きは猶姑息の見である。

—「解放せられたる詩歌」(帝國文学四一・四)—

とあるによつて、俗謡以外のものをも広く考えていたと知られる。

だが、これら以外の論文に見える名称、岩野泡鳴の「言文一致詩」(「昨年の新体詩界」読売新聞四一・一・五)、新潮の「口語体の詩」(「前月文芸史新潮四一・四」、正富汪洋の「口語体の詩」(「無気力者崇拜詩壇」新声四一・五)、中沢水鳥の「口語体詩」(「新詩月評」文庫四一・五)などは、「口語を使った詩」という以上の意味は示し得ていない。したがつて泣菫や雨情の民謡風作品もこの中に入り得るわけである。

(泡鳴・水鳥の論)

こうしてみると、これらの「口語詩」以外の名称の中には、「自由詩」の思想をいくらか含んでいたかに思われるものがあつたと言える程度に過ぎない。

しかし、「瘦犬」と「暗い扉」が出ると、「口語詩」その他の名称は次第に「自由詩」に近づいて来る。数個の論文を左に抄録してみる。

近頃の諸雑誌新聞を卒読しながらも吾人の一視線を逸せないものは口語詩の創作と其れに聯関する議論とである。が今吾人が議せむと欲する所は紙数に制限あるが故に成べく之れが範圍を縮めなければならぬ、でマダ見たことはないが薄田君が試みられたとか噂さるゝ子守唄の如きものは嚴密な意味合から天で詩の埒外に置かざるを得ぬ。

—火柱記者「口語詩の価値を問ふ」(火柱四一・五)—
今年になつてからは詩歌革新の論が色々の人によりて試みられ、口語体の詩もやがて一問題にならうとしてゐた処へ、突如として今月の「早稲田文学」に御風、露風の二氏によりて二篇の口語詩が表はれた。御風氏のは『瘦犬』で露風氏のは『暗い扉』である。

—服部嘉香「口語体の詩」(読売新聞四一・五・一〇)—

詩壇の風潮が漸時變つて行くに従つて口語の詩と云ふ事が一部の人に唱へられるやうになつた。五月の早稲田文学には御風氏の『瘦犬』と言ふのと露風氏の『暗い扉』と云ふのがある。口語の詩の価値と言ふ事に就ては又他日の機会を待つて感想を述べて見るつもりだが、兎に角此種の運動が起つて來たと言ふ事は詩界の爲正に慶賀すべき事に違ひない、従つて同情を持たねばならぬ。

—「前月文芸史」(新潮四一・六)—

『瘦犬』(早稲田文学)口語体詩である。而して氏が新らしき詩歌に対する抱負を實現したものと見てよからう。(中略)これ迄の口調体詩が只外形、而も文学上の末技にのみ流れて、内容に注意されなかつたに反して、新しい口語体詩は内容を第一義に取扱ふところに意義がある。

—中沢水鳥「新詩月評」(文庫四一・六)—

余は前号に於て同氏の口語詩に對して聊か批判を加へて置いた氏が茲に御風集一卷を紀念として新しき口語詩に向はんとするに際して、余は衷心から此詩面の成功を望む旨を一言して置く。

—RTO「詩壇漫言」(帝國文學四一・七一)

中にも御風露風二氏の口語詩は、外形の方面にまで自然主義をして切り込ましめた。此の口語詩が如何に發展して行くかは、本年の後半期になつて見ものであらう。(中略)要するに詩壇は動いて居る、変ぜんとして居る。自然主義詩の地盤の固くなつたこと、口語詩の顯はれたこと、(以下略)

—「六号活字」(文庫四一・八)—

此頃二三の人に依て試みられて居る口語詩でも、これでは無ければならんといふやうな作品が出たならば無論それは非常に佳いことには相違無いが、一体今日行はれて居る口語なるものが頗る不完全なものだと思ふ。

—与謝野寛「現今詩壇談議」(文章世界四一・八)—

これらに見える「口語詩」ほかの名称は以前にも存在した民謡調などの作品を指しているのではなく、またそれを含んでの名称でもなく、全然新しく出現した「口語を使った詩」を意味するものであつて、「瘦犬」と「暗い扉」を新しい出現であると思倣している点や水鳥の「内容云々」の言から考えて、のちの「自由詩」と一致する

のではないかとさえ思われるのである。

この事は次の論を見ると一層明確になって来る。

これが更に最近に至つて、内的生命を充実せしめ自由に之を表白せんには従來の形式を破つて主觀のリズムの十分に浮んで出るやうな自由なる形式を取らねばならぬとて御風の口語詩、又つい近頃の泡鳴の散文詩となつた。此の口語詩、散文詩は形式内容の一致的革命と見ねばならぬ。

—服部嘉香「詩歌の基礎論」(山鳩四一・八)—

では、はつきりと内容の革命までうたっている。したがって、同じ嘉香の

口語詩が問題となり、又多くの人によつて試みられるやうになつたのはツイ近頃の事で、相馬御風氏の『瘦犬』と三木露風氏の『暗い扉』が五月の『早稲田文学』に出た其れからの事である。

—「口語詩の出发点」(文庫四一・九)—

に見える「口語詩」も「自由詩」と一致していると考えられる。

以上はすべて「自由詩」という名称が現われる以前の論であるが、「口語詩」という名称の中に「自由詩」の思

想を含んでいたと思われる例を挙げてみたわけである。

ただ人見東明だけは考えが違つていたらしく、先にあげた「近刊の二詩集」でも雨情の民謡的作品を口語詩といっているし、

昨年夏には有明氏が口語詩を一篇公にした。

—「詩界断観」(読売新聞四一・八・二)—

と述べて、有明の七七七五の俗謡調を「口語詩」とよんでいるから、この「口語詩」は「自由詩」とは別物である。

このほか蒲原有明が「詩壇の近事」(新潮四一・九)の中で使つた「口語詩」は「自由詩」との接点を知るに由なく、RTOが

此の外猶ひとしく口語調の一体で俗謡詩の方面に進んでゆく人々もある。

—「言文一致詩」(帝国文学四一・九)—

と言っているのを見ると、「口語詩」は俗謡詩とも一致せず、「自由詩」とも同じでなく、広くそれらを包括した意味に使われている。

こうして見ると、この頃に使われた「口語詩」という名称には自由詩と一致(または接近)していると思われる